
想われて・・・

erika

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
想われて・・・

【Nコード】
N3026B

【作者名】
erika

【あらすじ】
ネットの掲示板に相談を書き込んだ事で知り合った優理子と和人。メールのやり取りをするうちに互いに相手を意識するようにはなつたが…人を想う事、人から想われる事について色々と考えてもらえる小説であればいいな、と思いながら書きました。

第1話

「ああ、寒い…」

優理子は両手に息を吹きかけて、軽く擦り合わせた。

駅前に並ぶベンチに座ってからもう30分が経とうとしていた。

その前までは駅前のビルの中の喫茶店に居ただけでも、2時間近く居ると、

さすがに長居しずらくなってきて店を出た。

もしかすると、雑踏の音に紛れて着信音に気づかずになっていたかもしれないという

淡い期待を胸に、着信のない携帯を何度も何度も確認する。

和人からは何の連絡もない。

でも、優理子はそれも無理はないかもしれないと思う。

今日はクリスマスイブ。しかも日曜日の夜なのだから…
きっと今頃は家族で食事にでも行っているにちがいない…

優理子はそう思いながら、家族サービスをする和人の姿を想像した。

和人には妻子が居た。優理子とはいわゆる不倫と呼ばれる関係だった。

何度も終わりにしようと思った。

そして、何度も「さようなら」を告げたりもした。

けれども、何度も和人から連絡があり、その都度「会いたい」などと言われてしまうと、結局はまた逆戻りしてしまい、会ってしまうのだった。

初めて会った時は、和人が既婚者だとは知らなかった。

妻も子供も居る相手だとは思ひもなかった。

嘘をつかれていたといえはそれまでだけれども、和人のプライバシーの事を

何も聞かなかった優理子にも責任はある。

優理子と和人はインターネットの掲示板で知り合った。

その頃、仕事の事で悩んでいた優理子は、インターネット上で色々な相談を

投稿できる掲示板を時々覗いていた。そして、そこで優理子の相談に乗ってくれたのが和人だった。

「仕事にやりがいを感じない。職場の人間関係がうまくいかない。

毎日、同僚から仲間はずれにされていて仕事へ行くのがとてもつらい：

いっその事、やめてしまおうかとも思っている」

優理子はそう掲示板に書いた。

そして、その書き込みに和人だけが返事をくれた。

「やめてしまう事は簡単だけど、どんなに小さな仕事でも自分がしてきた仕事を

認める事も大切だと思う。人間関係はどこへ行っても多少のもつれはあると思うし：

どうしても我慢できなければ辞める道もあるけれども、それよりも仕事以外にも

他に楽しみを見つけて私生活を充実させると、仕事は仕事と割り切れるように

なるし、仕事へ行くのがつらいと思う気持ちもなくなると思うよ」そして、返事の最後には「仕事での嫌な事や愚痴があれば、俺が聞いてあげるよ。

誰かに話せば少しはラクになると思うし、困ったらいつでもメールしてきて」と、

メールアドレスも書かれていた。

そして、優理子は、数日間悩んだ末、戸惑いながら和人にメールを書いた。

自分が職場では必要とされていない人間だという事、自分がしている仕事は

誰にでもできるような雑用のような仕事である事、そして、仲間はずれになった

原因として心当たりのある事についても…

和人は優理子のそのメールに対しても、とても丁寧に返事をくれた。時には相談や悩み以外のプライベートな内容も含めて…

優理子は和人とメールの交換をするうちに次第に和人に心を許すようになり、

そしてまた職場での嫌な事も忘れられるようになっていた。

第2話

和人とメールの交換をし始めて、何度目になる頃だっただろうか……その日のメールの最後には「一度、優理子に会ってみたい」と書かれていた。

メールを交換し始めて約3ヶ月：

ほぼ毎日のように交換してきたメールから優理子は和人の人の良さもわかっていったつもりだった。

困っている人がいると放っておけないほどに優しいという事も面倒見がいいという事も知り得ていた。

そして、だからこそ優理子は徐々に和人に好感を持ち始めていた。と同時に、少なからずとも和人も自分に好感を持ってくれていると思っていた。

そう感じていた。

だから、和人からのそのメールに優理子は嬉しく感じた。自分も和人に会ってみたいと心から思った。

けれども同時に、会って幻滅されたら……という思いを強く持った。パソコンのディスプレイを通しての会話。文字だけの会話。

それは相手の心の声でもあり、気持ちでもあり、相手の事を深く思っている。

本当の会話に違いない。

しかし、その背景には相手に対するイメージがついている。

互いに思い描いたイメージがついているのだ。

実際、優理子も和人に対してのイメージを持っていた。

優しく思いやりがあるという思いから、そのような柔らかい印象のある人物を

イメージしていた。

間違っても、体格が異様に大きくて、目が釣りあがっていて、髪型もパンチパーマ風の人などはイメージできなかった。

そして、優理子がそうイメージするように、和人も和人なりに優理子の事を

イメージしていると思うと、そのイメージと違うかもしれないという事が

この上なく怖かった。

会うと嫌われてしまうのではないか？ 今までのメールの関係がなくなってしまうのではないかな？

「どうしても会わないとダメかな？」

和人からのメールの返事に、優理子はそう書いた。

そうして優理子のそのメールの返事に和人は「優理子がどうしても嫌だと拒むのなら

無理強いはいしない。でも、俺は今ものすごく優理子に会ってみたい。優理子は俺とは会ってみたくない？」と書かれていた。

そして、その強い思いの込められた文字に優理子はOKを出すしか仕方なかった。

というよりも、優理子自身ものすごく和人に会ってみたくて仕方なかった。

初めて会った和人はメールでの想像通り優しい雰囲気を持った人だった。

少し高めの身長に、程よい肉づきのある体格。顔も落ち着いていて、芸能人に例えると、中井喜一に似ていると思った。

そして、何よりも優理子は和人の手に安心感を覚えた。

会ってからしばらくはぎこちなく少し離れて歩いていた二人だったけれども、

点滅する信号を渡る時に咄嗟に優理子の手を取った和人の手のぬくもりが、

感触がその後の優理子の心を捉えて離さなかった。

ずっと繋いでいたいと思うほどに、もうずっと昔から探し求めていた

手のような気さえした。

だから、優理子は信号を渡り終えた時も和人の手を離さなかった。和人が強握り締めたまま離してくれなかったというのもあるが、それよりも優理子自身、その手を離して欲しくないと願っていた。優しく、けれどもしっかりと握り締められた手を通して、優理子は和人は

自分の事を好きでいてくれるに違いないと思った。

そして、優理子自身も和人を好きだと確信していた。

もしも今、和人が付き合っていて欲しいと言ってきたら、

すぐにOKしてしまうかもしれないと思うほどに和人を愛おしく思っていた。

けれども和人はその言葉を口にする事なく、別れ際も優理子に一度背を向けたら

振りむく事もなく帰っていった。

優理子は雑踏の中に紛れていく和人の背中を見送りながら、もうこの次はないかもしれないと、ほぼ1日中ずっと手は繋いでいたけれども、

和人にとってはそこには好きという気持ちはなかったのだとそう思った。

いや、そう思おうとした。

その後、和人からメールが来るまでは…。

第3話

和人と会った翌日、いつもと何も変わらないというように和人からメールが届いた。

そして、そのメールの中には「昨日は会えて良かったよ。本当にすごく楽しかった」と書かれていた。

優理子は和人の思いが見えなくなっていたけれども「私も会えて良かったって思っています」と、書いて返事をした。

翌々日のメールには「また会ってくれるかな？」と書かれていた。

優理子は少し戸惑いながら「私もまた会いたいって思っています」と書いた。

さらに翌日のメールには「俺は優理子を好きになりかけてるかもしれない」と書かれていた。

優理子はその文字に少し違和感を抱きつつ「私もあなたの事を好きになりかけてます」と、遠慮がちに書いた。

けれども、それ以降、和人からのメールは来なくなった。

優理子は仕事から帰ってくるとすぐにメールをチェックするのだが、和人からのメールの返事はなく、夜にもう一度チェックし、夜中にも何度も気になってチェックしたりするようになっていた。

そのうち、もしかすると、和人の身に何かあったのかもしれないと考えるようになり、落ち着かなくなり、優理子は和人の返事を待たずに「ずっと返事がないですが、大丈夫ですか？ 体調とか崩されてませんか？ 元気ですか？」とだけ書いて、もう一度メールを送った。

和人からの返事は思いのほか早くその日のうちに届いた。

優理子は和人が元気なことに安心するとともに、少し不安も抱いた。和人からの返事には、元気だという事と仕事が少し忙しかったという事が書かれていた。

けれども、今まではどんなに仕事が忙しくてもどんなに夜中になっ

でも必ずメールをくれていたのだ。

そんな理由では、優理子の気持ちは納得がいかなかった。

優理子は何度も何度も考えてから「もしかすると私の事を嫌いになりましたか？」と書き、メールの一番最後に「近いうちにもう一度会って欲しいです」と書いて送った。

和人からの返事は翌々日に届いた。

「俺もすぐ会いたいって思ってるよ。でも、だけど本当は会わないほうがいいのかもしれないとも思っている」と書かれていた。

優理子はなぜ和人がそういうのか疑問に感じながらも、それは自分達がメールを通して知り合ったからなのだと思っていた。

「会わないほうがいいなんて言わないで欲しいです。もし私に会いたくなくなってしまうたのならば、私はもう二度とこんな事は言いません。でも、もしそうじゃないのならば、私はこれからも会って欲しいです。メールで知り合った関係だけでも、私はもっと仲良くなりたいです」

優理子はそこにありったけの想いを込めて、メールを送った。

それでも、和人からのメールの返事があいまいなら、もう諦めようと心に決めて：

やがて帰ってきた和人からの返事には、この週末にでも会いたいと書かれていた。

優理子は嬉しくなって、すぐにOKの返事を出した。

2回目の再会で、二人は迷う事なく、唇を重ねていた。

夜の海を見つめながら話しているうちに、会話が途切れ、互いの顔を見つめ合っているうちにそれとなく唇を重ねていた。

そして3回目のデートで、二人は親しい関係になった。

実際に会って3回目でそういう関係になるはそれは少し早いような気もする。

けれども、二人はその分メールで互いの気持ちを深めていたし、優理子もその事自体に何の迷いもなかった。

けれども、時折見せる和人の表情が優理子の心をつかんで離さなかった。

何かを迷っているような、悩んでいるような、和人はふとした時にそんな顔をよく見せた。

もちろん、和人自体、その事には気づいていないだろう。

けれども優理子はその事を見逃さなかった。

何度もどうしたのかと聞こうかと思ったりもしたけれども、喉まででかかったその言葉をその度に飲み込んだ。

なぜなら、まさか、彼に妻がいるとは思いつかなかったから…

第4話

広いこの世の中で偶然があるのだとしたら、それは本当になんて確立が低いんだろうと思う。

なんて運がいいんだろうと思う。

学生時代にお世話になった恩師、憧れていた彼、そして付き合っていた彼…

その誰とも今まで会う事などなかった。

どこかで会うかも…そんな風に思った事もあったけれども、年月が経つに連れて、

そういう偶然はまずない事を優理子は身をもって知った。

そのぐらい、優理子は街中で知り合いに会う事はなかった。

けれども、運命はすごく残酷だと思う。

会いたくない相手に限って会ってしまう。

知りたくない事に限って知ってしまう。

年を重ねていくと、人はまさか…と思うような事に直面してしまうこともある…。

和人と親しくなってから3ヶ月近くが経っていた。

その日は冬だというのにとっても暖かく天気の良い日曜日だった。

優理子はあまりにも天気が良かったので、普段は乗らない電車に乗って、

オープンしたばかりのショッピングセンターへと買い物に向かった。いつもは家の近くか会社の近くでしか買い物をしていないのに、その日に限って

違う路線の駅まで出向く事にした。

何故？と聞かれると困る。

天気の良さが、そして優理子の気持ちがそういう風に向いていただけだ。

秋の枯れ葉が舞い落ちてしまった街路樹を歩きながら、優理子は
1つと向こうに

見覚えのある横顔を見つけた。

「和人…?」

優理子はしばらくその横顔を見つめ、そしてそれが間違いなく和人
だとわかると、

急いで駆け寄っていった。

和人の家もこの近所じゃないはずだった。

優理子はその事に運命を感じながら、約束していない日に会えた事
に喜びを感じながら、

嬉しい気持ちを抑えるようにして、和人のもとへと走り寄っていっ
た。

「和人」

そして、声をかけた瞬間、それを後悔した。

「ど、どうしたの? こんな所で…」

和人は明らかに焦っているような困惑した顔をしていた。

「偶然ね。ちょっと天気良かったから、こっちの方に買い物に来
てみたの」

「そっか」

和人はそう言いながら、店の前のウィンドウの中をちらりと見た。

「和人は? 誰かと一緒?」

優理子は何の疑いも持たずに聞いた。

「ああ、うん、ちょっとね…」

相変わらず、和人は歯切れが悪い。

優理子はちよつと拗ね気味に「何よお、せっかく会えたのにその態
度は…」と

言いかけたその時だった。

「お待たせ」

長い髪の毛先にゆるくパーマをかけた髪型の女性が出てきた。

そして、その女性は「あら? お知り合い?」と和人に尋ねた。

「ああ、うん、会社の子」

咄嗟の出来事に、和人はそう答えていた。

そして、優理子はその言葉を聞いて、思考回路が一瞬止まったような気がした。

けれども、またすぐに動き出した頭と心で、優理子はすごく嫌な予感を感じた。

「そう、はじめまして。中尾の妻です」

その女性はまるで常に用意されている言葉かのように、そう言い、そして軽く一礼した。

優理子は和人の顔を見た。まるで、初めて会う人を見るかのようにじつくりと：

けれども、和人は優理子と視線を合わさず、うつむき加減で街路樹の先の方を

見ていた。

優理子は今の状況を理解できずに呆然と立ち尽くしていた。

やがて、和人の妻は「それじゃ…」と言い、和人は無言で優理子の隣を

通り過ぎて行ってしまった。

優理子はしばらく立ちすくんでいたが、ふと我に返り、周りの人の流れに乗るように

歩き出した。

後ろを振り向くことはしなかった。

後ろを振り向くと、全てが現実になってしまうような気がしたから：：ばーっとしながら、けれども真っ直ぐに前だけを向いて、ただひたすら歩き続けた。

第5話（前書き）

クリスマスの話として書いてきましたが、気づけばクリスマスが終わってしまいました。

でも、それでも最後までお付き合いいただけると嬉しいです。

第5話

『想われて…』 《第5回》

思い返せば、和人からは付き合っただけという一言もなかった。

そして、優理子も付き合っているのよね？と確認した事もなかったし、

大の大人が中学生や高校生のうちにそんな事を確認しあう必要もないと思っていた。

実際、和人とは頻りに会うようになっていたし、好きという言葉は互いに口にしていた。

けれども、今考えればどこがおかしかった事は明らかにわかる。

和人は、優理子からの電話を極端に嫌った。

「俺からかけるから、おまえはかけて来なくていいから」と、

優理子は何度も何度もそう言われていた。

電話で話したくなったら、まずメールで連絡を欲しいと、俺がすぐにかかけ直すからと、

そう言われていた。

和人のプライベートに何の疑いも持たなかった優理子は、それは優理子の電話代を

気にするあまりの和人の思いやりなのだと勘違いしていた。

けれども、本当は違っていたのだ。

妻が傍にいる時に電話などかかってきたら怪しまれるのも当然で、たいていの既婚者なら、まず間違いなく避けたがるのも当たり前なのだから…

そして、和人は絶対に外泊はしなかった。

優理子も親と一緒に住んでいたのも、そう軽々しく外泊をする事は

無理だった。

けれども、優理子がそうなくても構わないと思っっている時でさえ、和人は

「お母さんが心配するから…」と言って、優理子を必ず家に帰した。けれども、これも今思えば、自分が家に帰らないといけなからだったのだ。

もっと早くに気づくべきだった。

もったときちんと相手の事を聞いておくべきだった。

和人に妻がいる事を知ったあの日、優理子は心の底からそう思った。そして、別れようと思った。

今ならまだ戻れると思った。

今ならまだ全てをなかった事に出来ると思った。

けれども、優理子からは和人に連絡をする事が出来なかった。

電話はもちろん、メールを送ることすら躊躇われた。

もしも、もしもメール送って、返事が来なかったら：

そう考えると、優理子はメールを送るのが怖かった。

どうせ終わりになるのはもうわかっている。

それならば、このまま連絡をせずに、たぶん和人からも連絡など来ないだろうから、

そのまま自然に終わりになればいい：と、そう思ったりもしていた。けれども、その反面、言い訳をしてきて欲しいと思う自分もいた。

今、和人にどんな言葉を並べられても、それは単なる言い訳にしかならない。

嘘をついて、優理子と付き合っていた事には違いない。

けれども、言い訳をする価値があるほどの相手なのだと思いたかった。

何の連絡もないと、そんな価値すらない相手だと思われていたよう
で、

優理子はとても苦しくなった。

あの日から、鳴らない携帯を見つめながら、優理子は今和人は

何を考えているのだろうと何十回、何百回と考えた。
本当にもうこのまま連絡してこないつもりなの…?と。

第6話

和人から連絡が来たのは、あの日、街中で偶然会ってから、2週間が経った頃だった。

「どうしてる？ 元気？」

さも何もなかったかのようなメールに、優理子は苛立ちを感じながら、けれども責めても仕方がないと、平静を装って返事をした。

「元気だと思う？」

「うーん、どうかな、わからないけれども……」

そうね、あなたには絶対に私の気持ちなんてわかりっこない……

優理子はそう思いながら「元気よ」と短く返事を打った。

あの日からずっと放置されていて、元気なわけがない。

和人が結婚していたという事を知ったショックはものすごく大きかった。

2、3日は食事も喉を通らなかったし、寝ても覚めても和人の事ばかりを考えて過ごした。

全く音沙汰がなく、本当にこのまま連絡が途切れてしまうのかと思うと、何度も涙を流した。

それが流しても無駄な涙だとわかっていても流さずにはいられなかった。

「ずっと連絡をしなくて怒ってるか？」

和人は悪びれる様子もなく、聞いてきた。

怒っていると言って欲しいのだろうか、それとも怒っていないと言っ
て欲しいのだろうか……？

優理子はとりえず「怒ってないよ」と返事をした。

確かに、怒ってはいなかった。

怒りという感情は、優理子の心にはほとんどなかった。

けれども悲しかった。つらかった。そして何故？という想いばかりが胸をいっぱいにしていた。

何故、私と会ったの？

何故、私にキスしたの？

何故、私を抱いたの？

奥さんがいるのに…

「一度会おうか？ 会ってきちんと話そう」

和人はそう言って、優理子に時間を作ってくれるように頼んだ。

そして、優理子もまたそうしたいと思っていた。

本当は会えば会うほど、切なく、別れづらくなるというのに…

自分を裏切っていた相手など、会う必要もなく、電話やメール1本で別れてしまえばいいというのに…

でも、優理子にはそれができなかった。

そうする事が出来るぐらいなら、この2週間、何も悩む事はなかったと思う。

迷って、悩んで、それでも嫌いになれなかったのは、それ以上に和人を好きになっていたから…

和人に心を許していたからだった。

第7話

「ずっと黙っていてごめん…」

人気のない海辺に停めた車の中で、和人は優理子にそう言った。

「黙っていればいいやって、そう思ってたの？」

優理子がそう聞き返したけれども、和人は黙ったままタバコを吸っていた。

知り合った頃は、和人はタバコを吸わない人だった。

けれども、いつの頃からか、タバコを吸い始めるようになり、優理子も和人がタバコを吸う仕草が嫌いではなかったから、そのまま許していた。

けれども、今になってようやく気づいた。

和人がタバコを吸うようになったのは、自分と会っていた痕跡を消す為だったのだと…

そしてそう思うと、今まで許せていたタバコも無性に腹立たしくなってきた。

優理子はわざとらしく窓を全開にした。

外は真っ暗で始まったばかりの冬の冷たい風が吹いていた。

「ずるいよね。ずっと黙ってるなんて。こうなる前にもっと早く言ってくれば良かったのに… バレなければ、このまま続けていけると思ってたの？ それとも私が本気で恋してるって、言えば、傷つくとも思ってたの？」

優理子は精一杯の無理をして、高飛車に言ってみた。

「ちがうよ、それは…。言えなかったのは、俺が本気になってしまったからさ」

「何それ？ 意味わかんない」

優理子は窓の外を見たまま、言い返した。

「俺、最初は単なる好奇心でおまえと会ったんだ。メールのやり取りをしてる相手がどんな子かすごく興味があって、一度見てみた」

て…」

優理子は黙って聞いていた。

「でも、実際に会ってみて、話をしたらすごく真面目っていうか、真っ直ぐで一直線で、筋が通ってるっていうか、たぶん俺が結婚してる事を話したら離れてく子だと思った。ただそれだけでもう離れていくような気がしたんだ」

隣で、和人がタバコの煙を吐く息の音がする。

優理子はその吐息にすら切なさを感じながら、黙って和人の話を聞いた。

「でも、俺はどうしても終わりにしたくなくて、今までのメールをなかった事にしたくなくて、できればもう少し優理子の事を知りたいって思ってしまった。だから結婚してる事を言えなかった」

「結婚してる事を言わなかった事はもういいわ。でも、結婚してるなら、何故、私とキスしたの？ 何故、私を抱いたりしたの？」

優理子は自分達が深い関係になってしまった事を責めた。和人に対しても自分に対しても…

「好きになったから…」

和人はそういうと、吸っていたタバコの火を消し、そのまま優理子の右手の上に自分の左手を重ねた。

夜のドライブをする車の中、何度もそんな風に手を重ねて、互いに触れ合いながら時を過ごした。

時折、信号で車が停まった時には、手だけでなく、どちらからともなく唇を重ねた。

ずっとそうしてたくて、優理子は何度も信号が赤のままだといいのに…と思ったりもした。

けれども、今はその手のぬくもりすら切なく苦しいだけだ。

その手はもう自分のものではない。

いや手だけではない、心も体も、本当は全て自分のものではなかったのだから…

優理子は重なる和人の手の下から、自分の手を抜き取った。

そして、お腹の辺りに動かした。

和人は残った自分の手をギアの上に移動し、指先を小刻みに動かしながら言った。

「信じてもらえないかもしれないけれども、俺は本当に優理子が好きだったよ」

優理子はその言葉を黙って聞きながら、変わらずに窓の外を見続けた。

もしも今、和人の顔を見てしまったら、きっと泣いてしまうだろう。嘘でも、気まぐれでも、たとえ自分と会っていた事が世間で言われる浮気だったとしても、好きな人からそう言われれば嬉しいに決まっている。

そして、何よりも、和人が言った言葉が嘘ではないと思ったから、本当は和人も少しは自分の事を本気で好きでいてくれたのだとわかるから、隣に座っている和人の顔は見えないようにしていた。

「でも、俺、家族は捨てられないんだ。だけど、お前もすごく大事で……」

和人のその言葉をさえぎるかのように、優理子は言った。

「そんなの都合よすぎだよ。それに、もし仮にそうだったとしても……」

一気に喋ろうとして、優理子は言葉を詰まらせた。

「私達、もう終わりにしなきゃいけないよ」

最後まで言葉を続けてから、優理子は我慢しきれなくなって嗚咽を漏らした。

頭の中を和人と一緒に過ごした日々が蘇る。

楽しかった気持ちが湧き上がる。

メールをしていた期間が長い分、一緒に居た時間が少なくても、会った回数が少なくても、優理子の中では和人と過ごした時間はとても大きなものになってしまっていた。

もっと早くに知りたかった。

和人をこんなにまでも好きになる前に、会う回数がもっと少ないう

ちに、彼が結婚している事を知りたかった。

だって、優理子は初めからこんな恋を求めていたわけじゃないもの…

「俺は…」

和人は再びタバコに火をつけると、言葉が続けた。

「また前みたいになれたらって思ってる。会うのは無理でもメールをやり取りしてお前と続けていけたらって、そう思ってる」

「何言ってるの？ そんなの無理に決まってるじゃない」

「でも、俺は、今は無理でも、いつかお前が許してくれた時には、そういう関係に戻りたいって、戻るって思ってる」

「もしもこの先、街中で偶然再会したりした時は、一緒にお茶でも飲めたらいいと思ってる」

「だってさ、このまま連絡を取らなくなってしまって、音信普通になっちゃうのはあまりにも悲しすぎやしないか？」

優理子はただ黙って、和人の言葉を聞いていた。

本心としては、優理子だって、和人と別れたくはない。

恋人同士が無理なら、せめて友達という関係でも繋がっていたいと思っていた。

和人が言うように、メールフレンドに戻って、また昔のように他愛ないおしゃべりが出来たらどんなにいいだろうと思う。

でも、それは優理子にはとても出来そうになかった。

そうするには、あまりにも和人を好きになりすぎていた。

そうする事は、優理子にとってツライだけのなものでもなかった。

「でも私はあなたを許せない。ううん違う…。そうじゃなくて友達になんて絶対に戻れない」

どのくらいの間だったか、沈黙が続いていた優理子が口を開いた。

「そっか…」

和人はそう頷き、そしてまた沈黙の時間が流れた。

それは長い長い沈黙のような気がしたし、この先、もうどちらも話すことがないような気もした。

「じゃ、元気でね」

優理子はそう言うと、ドアを開けて、車を後にした。

和人が追いかけてきてくれるとは思ってはいなかった。けれども、せめて気にして欲しいとは思っていた。

車の中のバックミラーで見られているかもしれない：

そう思いながら、優理子は振り向かずにとだただまっすぐに歩き続けた。

そして、それが和人との最後になった：

いや、最後になると思っていた：

第8話

失恋するとその気持ちを解消する為に人が取る行動は様々だと思う。連日のようにお酒を飲む人もいれば、お金は大丈夫？というぐらい買い物をする人もいる、吐くぐらい食べて過食症になる人もいれば、家中を見違えるほどにきれいにするという人もいるらしい…。

そして、優理子の場合はネットに依存する事だった。

それで、本当に気持ちちが解消されているのかと聞かれれば疑問だった。

けれども、ネットで知り合った人との恋に破れて、気持ちを落ち着かせるにはやっぱりネットしかないような気がした。

とはいえ、優理子自身はそれには気づいていなかった。

和人と別れた翌日から、優理子はネットに依存するかのようになり、連日ネットに繋いでいた。

知人のHP訪問、ショッピング検索、チャット、そして出会い系サイトと呼ばれる類のメル友募集の掲示板に書き込みもしたりした。

顔も知らないけれども、男の人からたくさんのメールが来るのは気持ち良かった。

皆、何を期待してこんな事をしているのだろうと思うと、呆れたりもしたけれども、顔も知らない相手に気に入られようとして一生懸命に言葉を探して、それを伝えてくる相手を想像するのは悪い気分はしなかった。

けれども、ふと我に返った時、それらは、優理子にとって滑稽に思えた。

優理子はそんなメールをどこか冷めた気もちで読み、差し障りのない文章で返事を書いた。

バカバカしい…

時にそう思いながら…

けれども、数ヶ月前までは優理子も和人とのメールを心底楽しんで

いた。

たくさんの言葉でこちらの気もちを和ませてくれた和人、その時は本当に気もちを込めてメールを書いたし、楽しくて仕方なかった。でも、メールではその人の事を全部知るのは難しい。

どんなにその人が心を込めてメールを書いていたとしても、内面を知ることが出来ても、本当のその人の人物像が見えるわけではなかった。

なぜなら、言葉を選んで書いているから：

例えば年齢：これは黙っていれば、相手にはわからない。例え、会ったとしても、年齢よりも若く見える人、老けて見える人がいても何ら不思議はない。

そして彼氏彼女の有無、既婚未婚：

こんな事は黙っていれば、まず絶対にわかりはしない。

和人がずっと黙っていたように：

優理子がメールをやり取りする相手の中に、1人だけ、やけに長いメールを送ってくる人がいた。

いつも優理子が差し障りのない文章を適当に打ったものに対しても、すごく丁寧に、こちらが読んで楽しくなるような引き込まれてしまうようなメールを送ってくる人がいた。

そして、最初は、どこか冷めた気もちで読んでいたそのメールに、優理子は次第に引き込まれていった。

やがて、気がつけば、優理子は他の人のメールには返事をせずに、その人にだけ返事をするようになっていた。

他の人のメールに返事をする時間がないぐらいに、その相手は長いメールを送ってきたし、優理子も長い返事を返すようになっていた。そして、メールの交換を始めてから、3ヶ月ぐらいたった頃、その相手から「そろそろ会わない？」というメールが届いた。

メールをやり取りしていれば、そういう時が来るのは珍しい話では

ない。

和人との時だって、互いに楽しいと思い、相手に会ってみたいと思
い、そうなったのだ。

けれども、一度それで失敗している優理子にとっては、その誘いは
気を滅入らせるもの以外のなんでもなかった。

優理子はメールのその部分の事には触れずに返事を書いた。

けれども、彼はその後も何度かメールの所々にその手の誘いを書い
てきた。

もう誤魔化してはおけないと思った優理子は、ある日「何でそんな
に会いたいって思うのかな？」と返事を書いた。

彼は、メールの中だけでなく、本当の優理ちゃんが知りたいと言っ
た。

そして、メールの中の僕だけではなく、本当の自分も知ってほしい
と…。

優理子は彼のその言葉に和人にはない誠実さ、相手を思いやる気も
ちを感じた。

確かに和人も誠実だった。相手を思いやるような人だった。

でも、一番大切な部分では、相手を思いやることの出来ない人だっ
た。

本当の優理ちゃんが知りたいと言ってくれたその気もちに、本当の
自分を知ってほしいと言った彼の言葉を、優理子はもう一度信じて
みようと思った。

きつといい人に違いないと…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3026b/>

想われて・・・

2010年11月23日02時31分発行